

達今送來也。(同十三・八・六)

作答大島誠太書、致之永山平八(同十三・八・十)

「余奉朝請」とあるのは天保十三年(時に懺堂年七十二歳)三月幕府召見の命あり、四月朔入つて將軍に謁見した事を斥すのである。

以上が懺堂日歴に見ゆる贅川・桃年の事どもであるが、之からも贅川・桃年父子二代の學生事業ともいふべき史記考異に、懺堂の少なからざる感化があつた事を想見するのである。たゞ資料を日歴に限つた爲めに説いて詳らかならぬ所が多く甚だ遺憾である。又もともと大島君の「贅川・桃年父子の史記考異に就いて」を少しでも補ひ得ればと考へて拙書したものであるから、その内容も無味乾燥になつた。大方の諒承を得た

朶甘に就いて

明史や明實録の西藏關係の史料には屢々朶甘と云ふ地名が見える。實録を例にとると洪武七年十二月甲午の條に、

上以員外郎許允德使朶甘爲斯藏。

とある。爲の音は *wei* であるから直に誤とするわけには行かないかも知れないが實録中かゝる例は他に發見

* 松崎懺堂、名は復、字は明復、懺堂はその號、肥後の人。

明和八年(皇紀二四三二)に生れ、弘化元年(皇紀二五〇四)に歿す。享年七十四。その閨歴は颯谷岩陰の「懺堂松崎先生行述」、海野石窓の「掛川敬教授懺堂松崎先生墓表」に詳し。

** 『日本教育史資料』に「明倫堂助教ニ西坂衷(號成庵)アリ經義ニ精シ著書數卷アリ門人尤多シ、永山平等モ初メ其門ニ學フ」とあり。西坂の助教に轉じたことは懺堂日歴天保十・二・十一にも見ゆ。その門人永山平八は日歴に云ふ永山平八である。

『日本教育史資料』には贅川に關しても次の如く記してゐる。「治脩(加賀藩第十一世主)ノ時ニ至リ大島維直(號贅川)ヲ撰拔ス維直昌平僊ニ學ビ尤經義ニ精熟文辭アリ明倫堂助ニ擧ク齊泰(第十三世)ノ世ニ至リ都講ニ進ム」

(昭和十五年七月二十五日稿了)

出來ないからおそらくは烏の誤であらう。同じく實録の洪武二年五月甲午朔の條に、

遣使持詔諭吐蕃……使者至吐蕃、吐蕃未即歸命、尋復遣陝西行省員外郎許允德、往詔諭之。

とあるのと對應して朶甘烏斯藏が明かに吐蕃の範圍に含まれる事が考へられる。此の中烏斯藏が *dBust'ka's* の音譯で清代の衛藏なる言葉に當り、(68頁へ續く)

が出来ない元代特有の投下の内容が示される事になった。即ち支那内地に於ては官僚的封建國家が一度樹立された後なので、結局蒙古人の支配下に落ちたとは云へ元朝の國家は官僚的封建制を認めざるを得ず、遊牧的封建制と農耕的封建制と此の二つの異つたものの上に投下權が成立するのである。元朝に於ては遊牧封建制のもとに、領邑即ち本投下はヌトックを媒體として領主の部曲を構成し、純粹な封建集團に化して行き、農耕地帯のそれは前者の維持又は補足的な經濟地盤として發達した。このやうな變質の過程に投下の意義の變化は生じ、特に本投下を指す場合は愛馬なる稱呼が用ひられるやうになる。つまり投下より愛馬なる移行の道程は民族的千戶制度が封建的愛馬制度に發展した事を示して居るのである。以上は論文の大要であるが投下に就いては此まで安部小林兩氏の論考が若干あり、安部氏は投下の語源を犀利なる觀察眼を以て徹底的に究明し、小林氏又小論乍ら重要史料に着目して其の研究は漸次進展しつゝあつた。今村上氏の此の論文は其等を綜合して着實なる方法と慎重なる考察を以て蒙古社會の根本的問題たる投下の全貌を浮き上がらせたものである。氏は手許にある貧弱な史料によつて敢て臆測をめぐらしたと謙遜して居られるが、今後の蒙古研究に此の論文が與へる示唆は大きなものがあるであらう。本學報第一の力作として敬意を表する次第である。

本號には此の他「拔都終焉の年次に就いて」(岩村忍)、「外蒙古内西遊記の考證」(クレメンツ、橋磨橋吉譯)の二つ及び Harlan, Central Asia. Mc Govern, The Early Empire of Central Asia の紹介がある。Mc Govern の著に就いては「タカカ」に現在翻譯連載されつゝある事を付記しよう。概観すれば本號は元の研究が壓倒的に多い。而して宗教關係のものが一つもない。蒙古は地域的にも歴史的にも廣大である。今後は種種なる方面からの検討が内容に盛られる事であらう。自然科学方面の研究も考慮されて居ると聞く。將來の發展を望んでやまぬ次第である。〔佐藤長〕

(四十二頁より續く)

今の中央及び西部西藏を指すものなる事は Breischneider (Mediaeval Researches from Eastern Asiatic Sources, London, 1910. II, P. 221) 等が既に述べた所であるが、朶甘は何に當るであらうか。朶甘烏斯藏で吐蕃を意味し、明史兵志等では西蕃の條に最高の軍司令部として烏斯藏都指揮使司と共に朶甘都指揮使司が置かれた事を云つて居るのを見れば朶甘は東部西藏を指したものであらうとの想像は直に起つて来る。おそらく朶甘は mDo で今日の青海から Amdo 地方へかけた所、甘は Khams で sDe-dge より Ba-tan にかけての地方即ち現在西康省(此の康は明かに Khams から來て居る)となつてゐる方面を指したものであらう。つまり朶甘は烏斯藏と同じく mDo-Khams なる合成語と考へられる。mDo, Khams, dBus, g'Tsan. は相共に並んで西藏史料にもよく出て來る地方名である。(佐藤)